

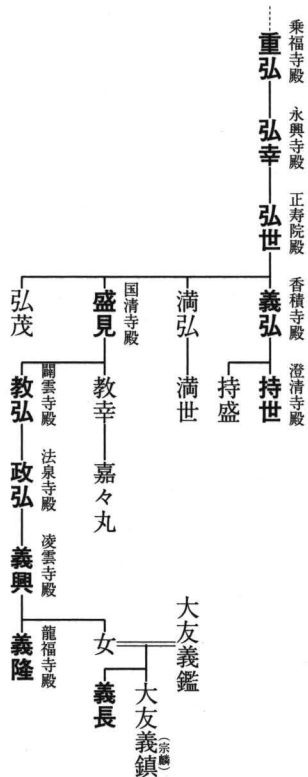
# 大内氏の国際展開——一四世紀後半〜一六世紀前半の山口地域と東アジア世界——

伊藤 幸司  
Koji ITO

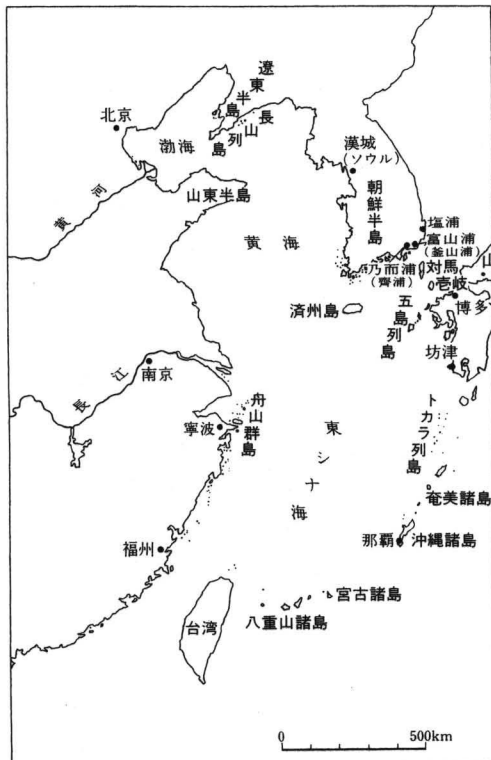
はじめに

本講演では、一四世紀後半〜一六世紀前半の約二〇〇年間（日本史の時期区分でいうと室町・戦国時代）、山口を本拠として西部中国・北部九州地域に勢力を展開した地域権力・大内氏の国際展開の概略について、最新の研究成果を織り交ぜつつ述べていく。

〔大内氏略系図〕



〔環東シナ海世界〕

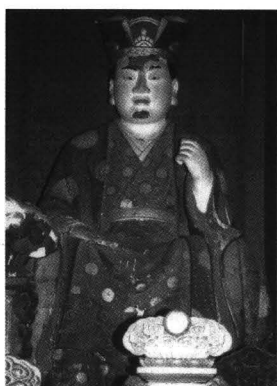


## I. 大内氏のルーツ

大内氏の国際展開について述べる前に、まず大内氏のルーツについて説明しておこう。大内氏の系図によれば、大内氏は琳聖太子とい



書「山口県史」史料編中世二、



う人物を始祖としている(「大内氏実録」など)。琳聖太子とは、かつて朝鮮半島西南地域に勢力を展開し七世紀に滅亡した百済国の王族で、日本に仏教を伝えたといわれる聖明王の第三王子と伝えられる。大内氏の祖先伝承によれば、琳聖太子が周防国の多々良浜に着岸の後、聖徳太子に謁し、大内県を采邑とし多々良の姓を賜ったということになっている。大内氏は日本列島の有力大名であるにもかかわらず、自らのルーツを朝鮮半島に求めていた。確かに大内氏は、かつて鉄製錬技術をもって朝鮮半島から帰化した氏族である可能性は高い。しかし、当時の日本の有力者の多くが「源・平・藤(藤原)・橘」にルーツを求めたのと比べると、独自に「多々良」姓を名乗り、国外にルーツを求める大内氏の姿は非常に特異といえる。現在、山口市大内御堀にある乗福寺(大内重弘の菩提寺)には、琳聖太子の木像とその墓と伝えられる石塔がある(左掲写真)。

では、大内氏のルーツが百済国の琳聖太子という伝承は確かなものであろうか。平安時代の文献史料によれば、仁平二(一一五二)年八月一日付け「周防国在序下文」に「多々良」と署名する三人の人物を確認することができ

る(「平安遺文」二七六三号文書)。また、正治二(一一二〇)年一月日付け「周防国阿弥陀寺田畠坪付」では「散位多々良盛綱」「権介多々良弘盛」なる人物が署名者としているが(「阿弥陀寺文

この弘盛は大内氏系図にも出てくる人物である。他にもこれに類する史料が散見できる。こうして考えてみると、文献史料でたどり得る大内氏の確かなルーツは、平安時代末期から鎌倉時代初期、周防国衙の在庁官人で、多々良または大内を氏とし、その地を本拠としたと推定される在地領主であったことが判明する。その後、南北朝期の動乱を巧みに切り抜けて、大内氏は周防・長門両国の守護職を獲得する大名に成長していったのである。一五世紀、大内氏が自らのルーツを百済国の琳聖太子に求めた一連の動向は、本来の史実とは異なるルーツの喧伝であった。しかし、その主張の背後には、当時の大内氏が置かれていた国際的位置が大きく関係していたと見るべきであろう。

## Ⅱ・激変する一四世紀の東アジア

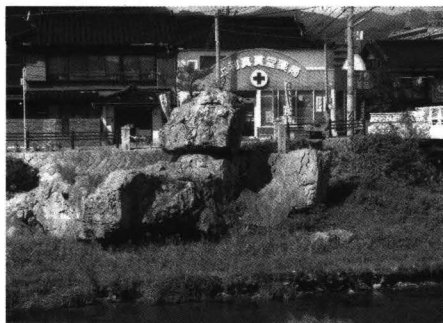
大内氏の国際展開は、一四世紀後半、東アジア世界の各地域で起こった政権交代と密接に関係している。一四世紀後半の東アジア世界は激動の時代であった。その端緒となったのが中国大陸で起こった王朝交代である。一三六八年、漢民族出身の朱元璋は、異民族国家「大元大モンゴル国」(通称は元)を滅ぼし、モンゴル人の支配者たちを中原から駆逐し、南京を都(第三代皇帝永楽帝の時に北京(燕京)に遷都し、以後、北京が中華帝国の都として君臨)として新たに「明」を建国した。明帝国は、漢民族の伝統的民族観である中華思想(華夷思想)を前面に押し出した国際秩序を再構築しようとした。「海禁」と「冊封」「朝貢」というシステムによって構築された国際秩序は、明帝国をめぐる民間レベルでの交易活動を低下させ、すべての貿易活動は国家の統制下に置かれた。そして、ここで成立した国際秩序が、その後二〇〇年間のアジアの基本的国際秩序となる。

一方、朝鮮半島では、モンゴル支配下の高麗王朝が衰退し、倭寇討

伐に多大な功績を挙げた李成桂が王権を譲り受け、一三九二年に朝鮮王国を建国した。朝鮮王国は、倭寇問題を最重要課題として位置付け、倭寇を平和な通交者へと変質させるために懐柔政策を行ったため、多様な日本人勢力が朝鮮王国と交渉するようになる。琉球列島では、群雄割拠するグスク時代から中山国・北山国・南山国の三つの国が鼎立する三山時代に入っていた。そして、朝鮮王国・琉球列島の三山は、ともに明帝国から冊封を受け、明帝国を中心とする外交秩序に入っていた。一方日本列島でも、一三三三年鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇による建武政権が打ち立てられたが、社会で力を付けてきた多くの武士たちの支持を獲得するには至らず、一三三八年足利尊氏によって室町幕府が開かれる。しかしその後も、後醍醐天皇方の南朝と室町幕府の支持する北朝とが抗争する南北朝の動乱は、一三九二年の南北朝合一まで続いた。まさに一四世紀後半は、日本をめぐる国際情勢が大きく変動し、それにもない新たな国際秩序が誕生した時代であった。

明帝国の初代皇帝に即位した洪武帝（朱元璋）は、大陸沿岸を襲う倭寇対策として、日本で倭寇討伐可能な勢力と交渉するために、

洪武元（一三六八）年以來、毎年日本に使節を派遣していた。洪武三（一三七〇）年、趙秩・楊載という人物が来日し、征西將軍懷良親王との交渉に成功した。しかし、その後、趙秩と朱本は帰国せず博多に三年間滞在した後、上洛を企てて山口に赴く。以後約一年間、彼らは山口に滞在し、丹波雲門寺の春屋妙葩らと漢詩文の応酬などを通じて情報交換を行ったことが『雲門一曲』と



鰐石

いう書物から分かっている。また趙秩には、「山口十境」と呼ばれる山口の名勝を詩文で詠んだとの伝承もあり、現在JR山口駅近くの瀬野川沿いにある鰐石などがその詩の題材となっている。一四世紀後半の山口は、大内弘世の時代であった。弘世は、本拠地を大内御堀から現在の山口市中心部に移転させた人物といわれている（ただし、大内氏館の発掘調査で出土した遺物では、弘世期までさかのぼる資料はない）。『太平記』巻三九によれば、上洛した大内弘世は「数万貫ノ銭貨・新渡ノ唐物等」を京都の有力者にばらまいた人物として描かれている。軍記物の誇大表現を考慮しても、当時の大内弘世は外国の産物を豊富に入手できる立場にあっただのであろう。まさに、先に述べた明使趙秩らの山口滞在はそれを傍証するものといえる。

この後、大内氏は東アジア進出のために、日本国内最大の国際貿易港でもあり、環シナ海世界でも有数の国際貿易港であった博多への接触とその支配を目論む。朝鮮半島で編纂された『海東諸国紀』で「琉球・南蛮の商船集まる所の地」と評価された博多は、国際交流を行うための機能（人・モノ・情報）が集積する地で、博多商人の貿易活動は環シナ海域諸国を股に掛けて行われる大規模なものであった。大内氏の国際展開は、まさに大内氏の博多進出と表裏のもとに実行されて行くのである。

### Ⅲ・朝鮮半島との交流

#### ○倭寇討伐

大内氏の具体的な国際展開は、一四世紀後半、まず大内義弘と朝鮮半島との間で始まった。大内弘世の子・義弘は、室町幕府から九州統一を任された九州探題今川了俊とともに九州地域を転戦し、了俊の九州平定に尽力していた。当時、朝鮮半島にあった高麗王朝は、朝鮮

半島を襲撃する倭寇に頭を悩ませており、倭寇禁圧を頻りに日本に要請した。当初、高麗が交渉先としたのは京都の室町幕府であった。しかし、成立間もない当時の幕府は、倭寇活動の巢窟であった玄界灘地域や北部九州地域を完全に支配しておらず、度重なる高麗側の要請にもまったく応える事ができなかった。そこで高麗は、倭寇をより実質的に取り締まる能力を持ちつつあった九州探題今川了俊を交渉先に変更した。高麗の要請を受けた了俊は、永和四(一三七八)年六月、早速、使僧信弘に六九人の軍勢を率いさせて朝鮮半島の倭賊を捕らえている(『高麗史節要』辛酉四年六月条・七月条)。実は、この時大内義弘も朝鮮半島に軍勢を派遣している事が、長府にある「忌宮神社文書」から判明する(『忌宮神社文書』(東京大学史料編纂所架蔵写真帳)永和四年四月一六日付け大内氏奉行人連署奉書、永和四年四月一七日付け某連行状)。翌年には、高麗から韓国柱が義弘のもとを直接来訪し、再び倭寇禁圧を要請している。これを受けて、義弘は朴居士なる人物に一八六人の軍勢を率いさせて、朝鮮半島に渡海させた。残念ながら、この時の義弘軍は高麗側の救援を受ける事ができず、倭寇と戦って大敗し、わずか五〇人ばかりしか帰国できなかった(『高麗史節要』辛酉四年一〇月条・五年閏五月条、『高麗史』卷一一四列伝・河乙泄条)。いずれにしても、大内氏が海を越えて、しかも国境まで越えて、隣国高麗のために倭寇討伐を行ったという事実は特筆に値する。その後、足利義満によって今川了俊が九州探題職を罷免されて失脚すると、義弘は日本側通交者の第一人者としての立場を確保し、朝鮮半島との関係もより深くなった。既に、高麗時代から倭寇討伐者として信頼を得ていた大内氏は、高麗に替わって建国された朝鮮王国との間にも良好な関係を形成し、通交貿易を展開した。さらに義弘は、倭寇討伐のみならず、倭寇によって拉致され、日本列島に転売されていた朝鮮半島の人々(被虜人)を助け出し、半島に送還するという行為もした

(『太祖実録』五年三月是月条)。大内氏は、倭寇討伐や被虜人送還によって朝鮮側の信頼を獲得し、恩を売る事で、日本列島のなかの誰よりも有利な朝鮮通交貿易を展開しようとしたのである。

こうした大内氏の立場は、朝鮮王国との間に正式な国交を樹立できないままだった室町幕府にも利用された。室町幕府第三代将軍足利義満は、大内義弘を仲介に立てる事で、正式に朝鮮との国交を築く事に初めて成功した。大内義弘は、いわば朝鮮王国と室町幕府とのパイプ役を果たしたといえる。大内氏の国際的地位は、その後も色褪せることなく存続し、例えば、外国の使節が船で瀬戸内海に入ろうとする時には、幕府の命を受けて、現在の下関で通交チェックを行い、また朝鮮の使節が来日した際は、海賊の跋扈する海域で使節一行のボディガード役を果たした。大内氏は、外国に向けられた日本の顔、或いは正面玄関としての役割を担っていたといえる。

このような関係から、朝鮮王国では大内氏の使節(これを朝鮮側では大内殿使と呼称した)は非常に高いランクで接待された。一四七一年に成立し、朝鮮王国の役人で領議政という現在の日本でいうと内閣総理大臣に相当する役職に就いた申叔舟の著した『海東諸国紀』という書物がある。この本は、以後、朝鮮外交官の必読書となった書物で、このなかに日本の使節が来たときの接待ランクを定めた「朝聘応接記」が収められている。これによると、大内氏の使節は、日本国王(室町政権の首長)室町殿に次ぐランクに位置付けられていた。接待のランクが高いという事は、より有利な通交貿易を恒常的に行えるという事を示している。それだけに、大内氏の名義を騙る偽大内氏の使節も跋扈したため、大内氏は、本物の使節と偽物の使節を見極めて接待するように朝鮮側に依頼した。この結果、明・景泰四(一四五三)年、朝鮮王国は大内氏に「通信符」と刻んだ右半分の印を下賜して、以後、この印を押す手紙を持った使節が本物の大内氏の使節という方法で真

偽を査証する手段を考じた。現在、この時大内氏が朝鮮からもらった「通信府」右符印は、真鍮製の印箱とともに毛利博物館に所蔵されている。

### ○通交貿易

次に、大内氏の朝鮮通交貿易の具体的な実態について説明する。大内氏の国際展開において、朝鮮半島の貿易は、通交回数や文物の往来からみて、非常に重要な外交活動であった。大内氏の主要な貿易目的は、端的に示せば、大蔵経や寺社造営資本の求請、その他諸々の朝鮮文物の獲得である。大内氏の使節は、通交目的を書き記した大内氏当主の手紙（外交文書＝書契）を持参し、山口から関門海峡・博多・対馬を経て、朝鮮の三浦を目指して海渡した。当時、朝鮮王国は日本側通交者に富山浦・齋浦・塩浦という三つの港しか開港していなかったため、大内氏の使節も三浦のどこかに寄港した。そして、ここから一路、朝鮮王国の首都・漢城（現在のソウル）を目指して上京したのである。

具体的な通交事例としては、例えば、応永一四（一四〇七）年、興隆



興隆寺



現在の齋浦

寺のために大蔵経を求請した大内盛見の通交貿易がある。山口市大内御堀氷上にある興隆寺は、かつては大内氏の氏寺として君臨した天台宗の大寺院で、妙見社という北辰信仰をよりどころに大内氏領国の精神的結集を計る装置としても存在していた。現在、この時の通交に起草された大内盛見の外交文書の写しが「興隆寺文書」のなかに伝来している（応永一四年四月日付け大内盛見書契案）。これによれば、この時、大内盛見は朝鮮から閩浙（現在の中国福建省と浙江省）系統の大蔵経下賜を望んでおり、その理由としてかつて先代の義弘が朝鮮半島から下賜された高麗版大蔵経と新たな唐本一切経とを校合し、より完全な大蔵経を完成して流布したい旨を述べている。大蔵経とは、すべての御経という意味である。当時の国内には、大蔵経を完備する寺社が稀であったため、大蔵経の所蔵は寺社のステイタスの向上に直結した。有力な寺社であれば、まとまった大蔵経の獲得は悲願であったといっても過言ではない。しかし、当時の日本には大蔵経を印刷できる版木が存在せず、大蔵経は容易に入手できる代物ではなかった。反面、隣国朝鮮王国には大蔵経の版木があったので、日本人たちは手取り早く朝鮮から大蔵経を貰ってくることを考えた。現在、韓国の国宝で世界遺産にも指定されている海印寺の大蔵経版木は、まさに室町時代の日本人の羨望的であった。結局、この時の通交で大内盛見は朝鮮から大蔵経を獲得し、御経は興隆寺に無事施入された。この他にも大内盛見は、岩国市の永興寺、防府市の松崎天神（防府天満宮）、山口市の国清寺（現在の洞春寺敷地に存在した禪寺）のために大蔵経を朝鮮から獲得している。国内では貴重な大蔵経が、多くの大内氏ゆかりの寺社に存在するのは、大内氏の外交活動故である。一方、大内氏にとっても朝鮮から大蔵経を獲得するという行為は、大内氏の社政策上、寺社の求心力を確保するという点で非常に重要な意味を持ち合わせていた。



興隆寺梵鐘

戦国時代、西日本最大規模を誇った巨大な梵鐘で、かつその形態や意匠は日本的梵鐘と朝鮮式梵鐘の特徴とが折り混ざった和韓混淆鐘という類型に属する非常に特異なもの

また、山口の乗福寺所蔵の「鷗庵遺稿」という書物によれば、天文七（一五三八）年一〇月、朝鮮に対して、大内義隆は儒教の書物である『朱子新注五経』や「刻漏制度之器」（水時計）の下賜を求める使節を派遣している。この時、義隆の外交文書を書いたのが、乗福寺の梅屋宗香という禅僧であったため、乗福寺の古い史料のなかに、朝鮮に出された手紙のコピーが伝来したのである（『送高麗国疏』）。興味深いことに、この大内義隆の手紙に対応する朝鮮側の手紙が、現在も毛利博物館に所蔵されている。明・嘉靖二〇（一五四一）年正月に出された朝鮮王国の外交文書で、朝鮮国礼曹（儀式・外交・教育を担当、現在の日本でいう外務省兼文科省）参判の地位にいた任権という役人が大内義隆に出したものである。内容は、義隆の求めに応じて、詩書（詩経と書経）、水時計、綿細・苧布などを贈ることを伝えている。毛利博物館の手紙は、まさに義隆の希望が朝鮮王国によって叶えられたことを示している。同時に、大内氏が朝鮮に水時計など、非常にユニークなものを求めていたことも分かる。大内氏と朝鮮王国の間で取り交わされた往復外交文書（手紙）がセットで残存しているという事は珍しく、非常に貴重な事例といえる。

このように、朝鮮王国と活発な通交貿易を展開した大内氏のもとには、大藏経や水時計の他にも、非常に多くの朝鮮文物が流入し、現在でもその影響の一端を確認することができる。例えば、興隆寺の梵鐘

である。この梵鐘は、室町・

戦国時代、西日本最大規模を

誇った巨大な梵鐘で、かつそ

の形態や意匠は日本的梵鐘と

朝鮮式梵鐘の特徴とが折り混

ざった和韓混淆鐘という類

型に属する非常に特異なもの

である。著名な筑前声屋の鋳物師によつて鑄造された梵鐘は、享禄五（一五三二）年八月、大内義隆によつて興隆寺に施入された。朝鮮鐘の影響を受けた巨大な梵鐘が、大内氏の寺に存在するという事自体、大内氏と朝鮮半島との深い関わりを象徴しているといえる。

また、最近調査が終了した乗福寺跡地第五次発掘現場からは、大内氏時代の乗福寺の伽藍（建物）に使われていた屋根瓦が出土している。注目すべきは、滴水瓦と呼ばれる屋根瓦が完全な形で出土したことがある。滴水瓦は、国内では文禄・慶長の役（壬辰倭乱・丁酉再乱）以前の瓦としては珍しいもので、一六世紀前半頃のものではないかと考えられている。滴水瓦に施された龍や鳳凰の文様も国内では例がなく、この種の文様は朝鮮では王宮の瓦に使用されるデザインであったらしい。一方、滴水瓦以外の出土瓦も特徴的であった。それは、乗福寺の瓦が桶巻瓦といって、桶に粘土を貼り付けて四等分に切り、一度に四枚の瓦を作る手法で製作されていたことが、出土瓦の断面などを調査することで判明したからである。桶巻式で瓦を製作する方法は、

当時の国内では用いられておらず、朝鮮半島で行われていたやり方であつた（以上、山口市教育委員会文化財保護課大内文化財担当者の御

教示による）。つまり、大内氏の菩提寺として大内氏と大変ゆかりが

深い乗福寺の瓦は、朝鮮半島との交流によつてもたらされた技術を全

面的に導入して造られていたのである。現在、乗福寺には室町時代の

寺の様相を描いた「乗福寺伽藍図」がある。ここに描かれた大内氏時

代の様相を描いた「乗福寺伽藍図」がある。ここに描かれた大内氏時



乗福寺跡地出土の滴水瓦

代の乗福寺は、恐らく朝鮮半島の寺院に見るような大陸的な建造物が建ち並んでいたであろう。このように、山口周辺地域の「大内氏時代」を物語る遺物には、朝鮮半島の影響を色濃く残したものが多く現存しているのである。

### ○祖先伝承

大内氏のルーツの所でも述べたように、大内氏と朝鮮半島との交流のなかで、大内氏が自らのルーツを朝鮮半島に求めたことは特筆に値する。大内氏が朝鮮百済ルーツ説を主張するのは、大内氏が本格的に朝鮮半島との接触を開始した大内義弘の頃にまで遡る。義弘は、朝鮮・定宗元（一三九九）年、朝鮮王国に対して「百済の後胤」であることを述べ、その家系・出自の証明するものと土田（田畑）を要求した（『定宗実録』元年七月戊寅条）。これに対して朝鮮王国の諸大臣は反対し、義弘自身も直後に応永の乱で敗死したことで先の要請は沙汰止みとなった。その後、朝鮮・端宗元（一四五三）年、義弘の甥に当たる教弘が、百済国琳聖太子の日本での活動を記した『琳聖太子入日本之記』の下賜を要請し（『端宗実録』元年六月己酉条）、朝鮮側は古書籍を与えた。さらに、朝鮮・成宗一六（一四八五）年、教弘の子の政弘も、琳聖太子の先祖の事績を知るために『国史』の下賜を要求し（『成宗実録』一六年一〇月甲申条）、朝鮮側は『三国史記』かその抜粋を「略記」という形で与えている。このように、大内氏が複数回にわたって朝鮮王国に対して百済ルーツ説を主張した背景には、朝鮮通交貿易上の利とかがあった。つまり、儒教を重んじる朝鮮王国を相手に通交貿易を行う際、同一の祖を主張することで日本列島の通交者のなかでも特別有利な立場を確保・主張しようと画策したのである。そして、この思惑は見事に成功している。朝鮮王国人は、大内氏のことを、他の日本側通交者とは異なり、倭寇禁圧を実現してく

れる頼もしい存在だと認識し、朝鮮半島出身という大内氏の主張する琳聖太子ルーツ説の影響で、特別な親近感を持って接していたようである（『太宗実録』八年五月庚午条、『世宗実録』一二年五月戊午条、『成宗実録』六年八月庚寅条、『成宗実録』一〇年四月癸卯条、『海東諸国紀』大内条など）。ただし、大内氏の主張する先祖観には、妙見信仰、高句麗・百済の建国神話、聖徳太子信仰の混合という特徴が見られるように、先祖観の構成要素のすべてが朝鮮半島モノでないことには注意しなければならない。大内氏は、百済ルーツ説を掲げると同時に、日本の朝廷官位も求め、氏寺興隆寺の勅願寺化も図っている。つまり、大内氏は単に朝鮮王国だけを権威として選択していたわけではなく、ここに大内氏の多岐な国際意識・権威意識を看取することができる。

### Ⅳ・明帝国・琉球王国との交流

一三六八年、洪武帝が建国した明帝国は、中華思想に基づいた外交秩序を周辺諸国との関係に厳密に適用した。この結果、それまで比較的自由であった環シナ海域交易は、「海禁」政策によって中国人海商の活動が禁止され、諸国の貿易船も明帝国と自由に通交できなくなった。明帝国と通交できるのは、明帝国皇帝の臣下として「冊封」された諸国の首長（国王）に許された「朝貢」船のみとなった。「人臣ニ外交ナシ」という文言に象徴されるように、国王以外の通交貿易は一切遮断され、環シナ海域のすべての交易活動は国家の統制のもとに行われるようになった。

日本では、足利義満が永楽帝から「日本国王」に冊封された。中国皇帝から正式に冊封された義満の行為は、まさに五世紀の「倭の五王」以来の出来事であった。以後、室町政権の首長（室町殿）が、日本

国王という立場で明帝国との通交貿易権を掌握した。貿易は、明帝国から下賜される「勘合」による査証制度を導入した朝貢貿易によって行われ、勘合を持たない船は明帝国から倭寇（海賊）と見なされた。勘合は日本国王にのみ下賜されたため、日本列島で明帝国と正式に通交できたのは日本国王だけであった。また、朝貢貿易という貿易形態の実態は、現在の経済感覚とは非常にかけ離れたものであった。中国皇帝は、入貢する諸国の国王使節に対し、徳治主義に基づいて大量の先進文物を分け与えたため、貿易収支だけを見れば朝貢貿易は明帝国の大赤字であった。しかし、明帝国にとって諸国の国王が皇帝に朝貢してくる姿は、皇帝権威の莊嚴化に寄与し、大量の回賜品は皇帝の偉大さを示すものと考えられていたため、朝貢貿易において貿易収支は度外視であった。反対にいえば、明帝国との朝貢貿易は、諸国の国王にとって、朝貢という屈辱的行為さえ問題にしなれば、これほど有利な貿易はなかったわけである。ゆえに、日本の多くの人々（有力寺社・有力大名・有力商人など）も明帝国との通交貿易への参入を懇望した。ただし、明帝国と通交できる権利は日本国王のみに許されていたため、人々は日本国王から勘合を獲得し、日本国王の使節として貿易に参画した。

大内氏が日明貿易に初めて参入するのは、東アジアにおける有数の貿易港・博多進出に成功した一五世紀半ば、宝徳三（一四五二）年発の第一次遣明船からである。遣明船の経営には、明帝国皇帝に献上する朝貢品の調達が不可欠であった。この時、大内氏は重要な朝貢品である南海（東南アジア）産物を獲得するため、琉球王国に使節を派遣している。当時の琉球は既に三山鼎立時代の終焉を迎え、一四二九年、中山王によって列島は統一されていた。そして、中山王は琉球国王として君臨し、琉球王国は独立した外国として環シナ海域を舞台に活発な中継貿易を展開することで繁栄を極めていた。東南アジア諸国

とも頻繁な貿易活動を行っており、那覇には大量の南海産物が存在した。以後、大内氏の琉球通交は、大内氏の遣明船派遣に連動して行われている。また、かつて琉球王国最高位を誇った禪寺円覚寺には、明・弘治八（一四九五）年の年次を有する梵鐘がある。そして、この梵鐘を鑄造したのは周防防府の鑄物師大和相秀であった。即ち、大内氏領国と琉球王国とは、大内氏の琉球通交にみるようになりに



揚州の大運河

太い流通ルートで結ばれていたことが窺われるのである。

さて、日本の遣明船は、明帝国が指定した貿易港・寧波（寧波）を東シナ海を横断した。黄河・長江などの大運河によって運ばれる大量の土砂で濁った海になれば、そこは「唐土」、即ち明帝国のエリアに來たと当時の日本人は認識した。船は、舟山群島から寧波に入って入国手続きを行い、ここから杭州や揚州などの大運河を通って北京へと旅をした。大内氏の遣明船には、博多商人や堺商人などの貿易商人の他に、非常に多くの禅僧が乗り込んでいた。例えば、下関市の関門海峡を臨む地にある永福寺の桂庵玄樹は、第一次遣明船の大内船の責任者（土官）として乗り組んだ。この時、同じ船に乗船したのが水墨画で有名な雪舟等楊である。雪舟は、入明して当地の禅寺



東隆寺南嶺和尚道行碑



(天童山景德寺など)を歴訪し、明帝国の様相を絵にした(『唐土勝景図巻』)。また、宇部市棚井にある東隆寺には、「南嶺和尚道行碑」なる巨大な石碑が建っているが、この碑文の文面は東隆寺僧の桂隠元久きんげんという人が大内氏の遣明船に乗り込んで入明し、中国の有名な人物に書いて貰ったものである。日本の寺院で、この様な巨大な中世期の碑文を見ることは珍しい。むしろ、この種の碑文は大陸の寺院でよく見られることから、これも大陸と直結する大内氏ゆかりの寺としての特徴といえよう。そして、まさにこのような商人や禅僧たちが、大内氏の国際展開を支えていたのである。

その後、大内氏は室町幕府周辺で権力を振るう有力大名細川氏と、日明貿易参入をめぐる激烈な勘合獲得競争を展開する。大内氏と細川氏の争いは、日本国内に止まらず、大永三(一五二三)年、明帝国の寧波で最悪の結末を迎えた。この時の第一七次遣明船は、大内義興よしおきの遣明使(正使・謙道宗設けんどうそうせつ)と細川高国たかくにの遣明使(正使・鸞岡省佐らんこうしやうさ)、副使・宋素卿そうそけい)という構成であった。大内船と細川船は別々に出国し、先に寧波に到着したのは大内船だった。しかし、遅れて寧波に到着した細川船の宋素卿が、明側の市船司しふねしに賄賂を贈ったため、細川船が大内船に優先して入関手続きを終了し、以後の接待も細川方が大内側より優位に執り行われた。これを、大内方の謙道宗設が憤慨し、寧波市船司の倉庫から武器を持ち出し、細川船正使の鸞岡省佐を殺害して船を焼き払い、宋素卿を紹興付近まで追い回し、放火乱暴行為を働いた上、取り締まりに当たった明帝国の袁雄えんしゆうを拉致し捕虜として海上に逃れ去ってしまった。この大事件を寧波の乱といい、この結果日本と明帝国の通交関係は断絶した。

しかし、日明間の国交を途絶状態のままにするわけにもいかず、明帝国は琉球ルートを通じて京都の室町幕府(細川氏主導)に国交回復の折衝をしてきた。大内義興も、独自に朝鮮ルートや琉球ルートの外

交ルートを駆使して、明帝国との通交貿易復活を画策した。詳細は省略するが、この結果、大内氏は日本と琉球王国を結ぶ流通ルートに多大な影響力を及ぼすことになり、日明関係も復活させることに成功した。最終的には、日本国王名義の遣明船を独占的に派遣する権利も獲得したのである。現在、毛利博物館に所蔵される「日本国王之印」は、日本国王(室町殿)が明帝国からもらった金印を模造した木印だと考えられているが、このような「日本国王之印」が大内氏のもとにあったのも、大内氏の日明貿易独占という状況があってこそその伝来品だと思われる。こうして、朝鮮半島との活発な交流に加えて、明帝国や琉球王国との関係も形成することで、大内氏は日本列島における大陸文物需要の窓口という地位を確固たるものとし、先進的な大陸文化の影響を直接受けることで、政治的・経済的・文化的に繁栄したのである。

## V・ヨーロッパ人との出会い

一六世紀に入ると、明帝国を中心とする外交秩序下の環シナ海世界にヨーロッパ人が登場する。一五一一年、ポルトガルが東西交通の要衝マラッカ王国を滅ぼしてマラッカを占領すると、一五一七年、初めて中国広東に入り明帝国との通交を試みた。しかし、明帝国はポルトガルが朝貢国でないことを理由に通交を拒否した。一五二二年、ポルトガルは再来航するが、明帝国に対して武力をちらつかせたため広東追放の憂き目にあった。明帝国の外交秩序の根幹をなす中華思想を理解できないポルトガルは、結局、明帝国との間に正式な通交関係を実現できないまま、密貿易という不法形態で貿易活動を行わざるを得なかった。

一方、当時の環シナ海域では、明帝国の海域支配力が低下し(海禁政策の限界)、海外貿易を指向する中国人海商や海民の活動が活発化

し始めていた。明帝国にとつては、国家の統制下のない人々密貿易者（倭寇（海賊））であった。この意味で、ヨーロッパ人が登場した一六世紀の環シナ海世界は、後期倭寇（一六世紀倭寇）と呼ばれる密貿易活動が活発化した時代でもあった。しかし、倭寇とはいつてもその構成員の主体は中国人で、倭寇の主要な根拠地の一つは、舟山群島の双嶼<sup>リヤンポ</sup>だった。そして、明帝国との正式通交を拒否されたポルトガルは、この倭寇活動と密接に連携して貿易活動を展開し始めたのである。注意しなければならないのは、マラッカ以东の環シナ海世界は、このような中国人海商の密貿易ネットワークが張りめぐらされた世界であり、環シナ海域を縦横無尽に航海していたのは中国のジャンク船であったことである。新たにこの世界に参入してきたポルトガルも、独自にネットワークを形成することは不可能であり、中国人海商の船に便乗し、中国人海商の密貿易活動に混じることで貿易活動を充足させていたのである。ゆえに、南蛮屏風に見るような大型の南蛮船が、当時の東アジア世界（もちろん日本にも）に直接渡航して来たわけではない。有名な種子島への鉄砲伝来も、中国のジャンク船に便乗していたポルトガル人によって伝えられたのである。

フランシスコ・サビエルがやって来たのは、まさにこのような倭寇の世界が盛況な東アジア世界であった。サビエルは、インドのゴアからマラッカに來航し、マラッカで薩摩人アンジローと出会う。この出会いを期に、サビエルはマラッカから中国人のジャンク船に



サビエル公園

乗って天文一八（一五四九）年鹿兒島に上陸した。その後、平戸、山口を経て、天文二〇（一五五二）年に念願の上洛を果たすが、京都滞在僅か一日間で現状を知って平戸へ戻る。この後、サビエルは山口の大内義隆のもとでの布教活動を決心した。この決断の背景には、国際展開によって育<sup>はぐ</sup>まれた大内氏の先進性や、それに裏付けられた豊かな国力が挙げられる。サビエルは、祭器や「日本国王」に献上予定だった時計・楽器・眼鏡・ポルトガルの酒・織物など珍奇な贈物と、インド総督・ゴア司教の推薦状を携えて、天文二〇（一五五二）年四月、山口に再来した。サビエルと面会した大内義隆は、サビエルに領内での布教の許可と、教会建造の許可を与えた。大道寺の呼称で有名な教会の跡地は、「山口古図」（山口県文書館所蔵）の記載によって現在の山口市金古<sup>かこ</sup>曾<sup>そ</sup>付<sup>こ</sup>に比定され、当地にサビエル公園が造られているが、この比定自体に確実な論拠はない。なお、大内氏最後の当主・大内義長<sup>よなが</sup>が大道寺の創建を許可した文書は、その後、そのコピーが宣教師を通じてヨーロッパに伝えられ、イエズス会書簡集の一つとしてヨーロッパで出版された。その出版物は、現在でも何種類か確認することが可能である（例えば、ポルトガル外務省図書館所蔵の「原稿」など）。それを見ると、漢字の読めないヨーロッパ人のために、漢文の横にポルトガル語やラテン語で語釈が書かれているのが特徴的である。この史料は、まさに当時の異文明の遭遇を象徴しているものだと見える。

#### おわりに

朝鮮王国・明帝国・琉球王国と活発に通交貿易を展開し、義隆・義長の時代にはヨーロッパ人とも遭遇した大内氏は、一六世紀の半ば、陶隆房<sup>すえはるかた</sup>（後の陶晴賢<sup>すえはるかた</sup>）の反乱を経て、弘治三（一五五七）年四月三日、

大内義長が長門長福寺（現在の下関市の功山寺<sup>こうざんじ</sup>）において自刃したことで滅亡する。大内氏の滅亡は、単に一大名の滅亡に止まらず、日本列島をめぐる国際関係に多大な影響を及ぼした。日明関係では正式な遣明船が途絶し、二度と復活することはなかった。日朝関係では、朝鮮側が大内氏の滅亡を一五九〇年まで知らず、日朝貿易は対馬宗氏の独占状態となった。日琉関係では、大内氏に替わって南九州の薩摩島津氏が台頭する画期となっている。このような歴史上の激変を考慮すれば、大内氏の国際展開が環シナ海世界においていかに存在感があったものかを窺うことができる。そして、それまで大内氏の都として東アジア世界に位置していた中世都市山口は、大内氏の滅亡とともにその国際的地位を低下させざるを得なかったのである。

〔主要参考文献〕 五〇音順

- 熱田 公 『大内義隆』（平凡社、一九七九年）  
 伊藤幸司 『中世日本の外交と禪宗』（吉川弘文館、二〇〇二年）  
 『中世後期における対馬宗氏の外交僧』（『年報朝鮮学』第八号、二〇〇二年）  
 『大内氏の琉球通交』（『年報中世史研究』第二八号、二〇〇三年）  
 金谷匡人 『大内氏における妙見信仰の断片』（『山口県文書館研究紀要』第一九号、一九九二年）  
 古賀信幸 『守護大名大内氏の居館跡と城下山口』（『守護所から戦国城下へ』名著出版、一九九四年）  
 小葉田淳 『中世南島通交貿易史の研究』（日本評論社、一九三九年）  
 『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院、一九四一年）  
 須田牧子 『室町期における大内氏の対朝関係と先祖観の形成』（『歴

史学研究』第七六一号、二〇〇二年）

『15世紀における日本の朝鮮仏具輸入とその意義』（『朝鮮王朝実録』からみた日本と朝鮮）韓日文化交流基金・韓日関係史学会、二〇〇三年）

『中世後期における赤間関の機能と大内氏』（『ヒストリア』第一八九号、二〇〇四年）

デ・ルカ・レンゾ 『「大道寺裁許状」とイエズス会史料の比較研究』（『九州史学』第一三五号、二〇〇三年）

東武美術館・朝日新聞社編 『大ザビエル展図録』（東武美術館・朝日新聞社、一九九九年）

中村栄孝 『日鮮関係史の研究』上巻（吉川弘文館、一九六五年）  
 橋本 雄 『室町・戦国期の將軍権力と外交権』（『歴史学研究』第七〇八号、一九九八年）

平瀬直樹 『大内氏の妙見信仰と興隆寺二月会』（『山口県文書館研究紀要』第一七号、一九九〇年）

真木隆行 『周防国興隆寺の中世梵鐘とその銘文』（『平成一三〜一五年度科学研究費補助金基盤研究(C)2』成果報告書・古代

近世の中国地方における採鉱冶金に関する総合的研究』山口大学人文学部、二〇〇四年）

松田毅一 『大内義長の大道寺裁許状について』（『古文书研究』第四号、一九七〇年）

村井章介 『アジアのなかの中世日本』（校倉書房、一九八八年）  
 『東アジア往還』（朝日新聞社、一九九三年）

『海から見た戦国日本』（ちくま新書、一九九七年）

山口県立美術館編 『大内文化の遺宝展図録』（山口県立美術館、一九八九年）

〔附記〕

本稿は、山口県立大学とスペイン・ナバラ州立大学の協定締結を記念して、二〇〇四年一月五日に山口県立大学で開催された地域国際化フォーラム「山口・ナバラの大航海時代と国際化」における日本側基調講演「大内氏の国際展開」を原稿化したものである。

(日本中世史)